

天使の卵

2006(平成18)年10月21日鑑賞(梅田ピカデリー)



監督＝富樫森／原作＝村山由佳『天使の卵 エンジェルス・エッグ』（集英社刊）／出演＝市原隼人／小西真奈美／沢尻エリカ／戸田恵子／北村想／鈴木一真／特別出演＝三浦友和（松竹配給／2006年日本映画／114分）

……最近は人気小説の映画化が顕著。これもその1つで、100万部を突破した直木賞作家村山由佳の『天使の卵 エンジェルス・エッグ』が原作。一目惚れされる年上の女性は、発泡酒のコマーシャルで今絶好調の小西真奈美だが、その若い男が妹の恋人だったという設定がミソ……。しかし、悲恋小説特有のエンディング(?)に私は少し疑問も……。？ もっとも、そうだからこそ続編小説も好評らしいが……。

第4章

原作は人気小説らしいが……

この映画の原作は、直木賞作家の村山由佳の『天使の卵 エンジェルス・エッグ』で、これは「100万人の心に響いた純愛小説の金字塔」とのこと……。その主人公は19歳の予備校生の一本槍歩太（市原隼人）と27歳の美しい精神科医、五堂春妃（小西真奈美）、そして春妃の妹で歩太と恋人同士の歩太の同級生、斉藤夏姫（沢尻エリカ）の3人。読者に名前をよく覚えてもらおうという意図があったのかどうかは別として、誰でも一度聞いたら忘れられない目立つ名前……。

この『天使の卵 エンジェルス・エッグ』の10年後には『天使の梯子』が、さらにその2年後には『ヘヴンリー・ブルー』が出版されているとのこと。そして、最初からネタバレで恐縮だが、春妃は死亡してしまうから、『天使の梯子』は成長した歩太と夏姫の物語であり、『ヘヴンリー・ブルー』は夏姫の回想物語らしい。したがって原作では、歩太と春妃、夏姫のキャラは一貫性のあるものとされているようだが、残念ながら私はそんな原作を全然読んでいないから、以下の評

好きだから、ついにやっちゃいました！

論は映画を観た印象だけで……。

2人は恋人同士だが……

一足先に現役で大学に合格した夏姫と、美大の受験に失敗し目下浪人中の歩太は恋人同士で、それは小料理屋を営んでいる母親の一本槍幸恵（戸田恵子）も公認のもの。というより、幸恵は「こんな娘がいたら」と思い、夏姫は「こんな素敵なお母さんがいるから歩太にホレた」とシャーシャーと言っているくらいだから、かなりホンモノ。

幸恵が心を寄せている（？）客の渋沢（三浦友和）がやってきたため、愛犬のフクスケを連れて店を出た2人だが、ラブホテルの前を通りかかると夏姫が「寄ってく？」と誘い、「フクスケ連れて？」と歩太が答える姿を見ていると、その仲は相当進んでいることも明らか……。こんな一見ラブラブの2人だったが、実は歩太は病気でずっと精神科に入院している父親一本槍直規（北村想）のことを悩んでいる様子。したがって、恋の進展に積極的でいつも明るい夏姫に比べると、歩太は多少消極的。さて、これは……？

一目惚れは満員電車の中……

春妃を演ずる小西真奈美は最近発泡酒のコマーシャルでの活躍が目立ち、『UDON』（06年）でもいい味を出していたが、多分この『天使の卵』が彼女の美しさを一番発揮させているのでは……？ なぜなら、この映画では春妃は歩太によるデッサンや油絵のモデルとして輝いていなければならないのだから……。

浪人中とはいえ、日々デッサンに励んでいる歩太の目が、その美しさにクギづけとなったのは満員電車の中。ホームの上で乗ろうかどうか迷っている春妃を見た歩太は、とっさに乗客を奥の方へ押し退けて入口に1人分のスペースをつくったから、春妃は自然とそこに乗り込むことに。これによって、歩太は少なくとも一駅分は、窓から外を見ている春妃の姿を拝むことができることになったからラッキー。まるで一流の画家のような目で春妃の横顔を見てその姿を脳裏に刻み込んだ歩太は、その日の夜、そのすべてを吐き出すようにその姿のデッサンに励んだが……。

🎬 何と春妃は夏姫のお姉さん……

その日から春妃のことを考えて悶々とし、夏姫と会ってもあまり気乗りしない歩太だったが、春妃と再会できたのは、何と父親を見舞いに行った病院の庭。無心で庭いじりをしている直規の姿を見て、「あら一本槍さん、息子さんですか？」と声をかけてきたのが白衣姿の春妃で、何と彼女は新たに父親の主治医となった女医さんとのこと。春妃が満員電車の一件を覚えてくれたのはうれしかったが、自己紹介した後、「同じ学年に斉藤夏姫っていなかった？」「妹なの」との言葉に歩太は大きなショックを……。もともと何れともあれ、これで病院に行く楽しみが増えたことは確か……。年上の美しい女性に恋心を抱くという体験は、男なら誰でも1度や2度はあるはずだが、それが現在つき合っている恋人のお姉さんとなると、話は別で、そりゃちょっとヤバイのでは……？

🎬 めでたいはずの仮退院だったが……

主治医が春妃に代わったおかげ(?)で、それまで無表情、無反応だった直規の症状に少し改善の兆しが……。そのため、春妃の判断によって、直規は仮退院することになり、今日は久しぶりに自宅で家族3人が食事することに……。ウキウキと支度をしていた母親だったが、テーブルの上に美しく盛りつけられた手づくりの筍寿司にじっと見入っている直規の姿を見て、胸がいっぱいに……。

ところが、何がラッキーで何がアンラッキーかはわからないもの。少し意識が回復した直規は、ある日ビルの屋上から飛び降りるという悲惨な結末に……。これはひょっとして、仮退院を許可した春妃の医者としての判断ミス……？ そんな疑問がふと私の頭をよぎる中、葬式に姿を見せた春妃は、幸恵の前で畳に頭をこすりつけて「申し訳ありません。私のせいで……」と謝罪したから、それを見た病院関係者は大慌て。だって、公にこんな行動をとれば、病院側は自ら医療過誤を認めたことになってしまうから……。

🎬 やっぱり母親のそんな姿は大ショック……

歩太は夏姫に対しては、母親のことを「世間的には二股かけてる」と言ってい

たのだが、現実には母親が渋沢と抱き合っている姿を見ると、やはりショックは大きかったよう。18、19歳にもなれば、それくらいは納得ずくだと思うのだが、それを見てショックを受けている自分がショックだったのかもしれない……？

そんな歩太が自転車で向かったのは、やはり春妃の部屋。もちろんそこを訪れたのは迷いながらの行動だったし、インターホンを押しても返事がないので、やはりマズイと思って帰ろうとしたのだが、そんな時開いたドアから「歩太君？」と声をかけてきた春妃は救いの女神のよう……。そんな春妃から、「ひどい顔してる」と言われ、「入って」と言われたら誰だって……？

2人を結びつける絶好のシチュエーションは……？

歩太が春妃の部屋に入ったのはこれが2度目。そこで結果的に、2人を結びつける役目を果たしたのが、病院内で春妃に言い寄っている医師、長谷川（鈴木一真）の登場だった。「今何時だと思ってるの！」という抗議めいた発言を無視して、「コーヒーもらえないかな」「酔ってますよ！」と言いながら強引に部屋の中へ入ってきた長谷川だったが、あまりにも強い抵抗を示す春妃を見て急にムラムラときたのか、その場でいきなり春妃の上に覆いかぶさってきたから大変。もし誰もいなければ、春妃はそのまま力づくで長谷川のものに……？

そこで「正義の味方」然として飛び出し、長谷川にパンチを一発食らわしたのが歩太。「またお前かよ！」と言いながらも、長谷川はそれ以上対決する意欲を失ったのか、「道理で病院が訴えられなかったわけだ。女は得だよな」との捨てゼリフを残して部屋の外に……。さあ、そこで血のついた歩太の手の治療をする春妃だったが、そんな中2人は……。

2人が結ばれることになるこんな絶好のシチュエーションは、まさに長谷川が提供してくれたようなもの……。

二股がバレたのは最悪のシチュエーション……

その日以来、歩太の心の中は春妃でいっぱいとなり、夏姫のことは全く考えられない状態に……。しかし、夏姫はあくまで浪人中の歩太に夢中で、あれこれと世話を焼いてくるから歩太は困ったが、こんな二股状態はいずれバレるに決まっ

ている……？ それがバレたのは、2人が春妃の部屋の中でイチャついているところに夏姫が乗り込んでくるというシチュエーションとなったから最悪。その場で夏姫が吐いた言葉は、「嘘つき……」「一生恨んでやるから……」という実に恐ろしいもの……。それが一瞬の言葉のアヤだったのか、それとも夏姫の本心だったのかは別として、これによって春妃の心が乱れに乱れたのは当然……。さて、そこで歩太の「僕らが幸せになることだけ考えよう」という説得、慰めは、ホントに通用するのだろうか……？

どんないんていんぐに……？

あれこれのストーリーがいろいろと展開していく中、私はこれから一体どんなエンディングになっていくのかという点に興味を持ちながら、ひょっとして悲恋物語特有のエンディングもありうるのかなと思っていると、案の定……？

夏姫に2人の関係を目撃された後、かえって覚悟が定まったのか、今や歩太はアトリエにこもって懸命に春妃の絵を……。他方、春妃は自分の部屋のベッドの上に腰かけて編み物をしていたが、突然手を下腹部にあてながら苦しい表情に……。それに続いて、編み棒が春妃の手を離れ、糸が床の上に転がり落ちてきた。さて、この異変はナニ……？ ひょっとして……？

その後はあなたの目で……

そうか、やはりこういう結末を迎えるのかと私は半分納得し、半分白けながらその後の展開を見ていたが、その是非は皆さん自身の目で判断していただきたいもの……。

ただし、ここで面白いのが、この映画のタイトルとなっている「天使の卵」の由来。さて、春妃が呼んでいた「天使の卵」とは一体ナニ……？

そしてもう1つ、これは映画でなければ感動を呼べないのは、「天使の卵」を両手で温めるように持っている、長い髪をした春妃の姿を描いた1枚の油絵。この1枚の絵にどれほどの歩太の思いがこもっているのかを感じることができれば、この映画の良さをあなたも感じることはできるはず……。

2006（平成18）年10月24日記